第９号

おらほのまち

令和７年度

大町市連合自治会だより

●発行：大町市連合自治会 TEL0261-85-0531 ●編集：常任委員会 広報部会

大町市常盤清水の子ども会育成会と自治会が企画した朝活イベント「モーニングッド清水」が今年から始まった。「地域の子どもたちは地域で育てる」をコンセプトにさまざまな運動を通じて幅広い世代が交流を深めている。

自治会活動で安心・安全さらに

大町市連合自治会長　長澤　奨

自治会は、公民館活動やお祭りなど地域行事のほか、資源ごみのリサイクルや地域の清掃等の環境活動、防犯・防災活動、社会福祉活動など市民の暮らしに欠かせない公共的な活動を行っています。

しかし、近年の人口減少・少子高齢化の進展は、住民の生活に係る各種サービスや行政サービスの縮小・廃止など市民の生活に大きな影響を及ぼすとともに、自治会においても、担い手不足や加入率の低下などにより、従来のような活動が難しくなっています。

自治会が活動を継続し、地域の安心・安全な生活を守っていくためには、行政の協力、支援が必要不可欠です。行政と連合自治会とが協力して取り組んでいく必要があると考えます。

連合自治会だより「おらほのまち」は、自治会について大勢の市民の皆さんに知ってもらうよう、自治会の活動などを紹介するとともに自治会への加入促進の一環として発行しています。なお今回の第９号は、より気軽にご覧いただけるよう、今までのタブロイド判から市の広報誌と同じＡ４判で作成しています。

目次

２・３面
防災特集「そのとき集落は」
４・５・６面
「まちに暮らす、まちを創る」
市民記者が地域づくりに迫る
７面　地域活動紹介

防災特集 そのとき集落は

今後の防災のあり方について語る北澤さん（右）

迅速な安否確認で「安心感」

八坂地域　大平自治会長の北澤さんに聞く

7年4月震度5弱地震が大町襲う

4月18日午後8時19分ごろ、震度5弱の強い揺れが大町市を中心に襲いました。人身被害はなかったものの、建物の屋根や壁、塀の破損・崩落など各地で被害が確認されました。断続的な揺れの中、住民の不安をやわらげたのは、隣近所の仲間であり、自治会の存在でした。発災から15分程度で安否確認を完了させるなど高い防災力をみせた八坂地域の大平自治会長の北澤尚泰さん（62）に話を聞きました。

発災時、自治会長として心掛けたことはありますか―

突然の大きな揺れに、とにかく驚きました。「集落の仲間は無事か」との思いが先行しました。13世帯約30人が比較的小さなエリアの中で暮らす集落であることから、電話で連絡を取り合うより各家に足を運んだほうが早い、顔を合わせることで安心してもらえるのではと考え、自宅を飛び出しました。

各家を巡る中、「大丈夫だよ」の返事に安堵しました。大平や相川など6集落で組織する上部組織の大平自治振興会・自主防災会に対する安否確認の報告までに15分はかからなかったと思います。

発災直後に重要なのは安否確認だと思います。早ければ早いほど、安全確保に向けたさらなる一手を進めることができると考えます。

高い防災力に欠かせないものは何と考えますか―

八坂全体に言えることですが、脆弱で急峻な地形に位置することから他と比べて地滑りなどの危険性が高いです。

また、小さな集落単位で自治会活動・まちづくりが行われています。そのようなことから助け合いの意識は強いと思います。

高い防災意識とともに、日頃の密なコミュニケーションのおかげで防災力を発揮できると感じています。

小規模だからこそ言えることかもしれませんが、集落の仲間は家族のようなもの。災害時を含め、「誰一人取り残さない」ことを大切にしています。

防災力の向上に向けさらに必要とされることは何と考えますか―

今回は、孤立や避難所生活が強いられるなど大きな被害はなかったですが、そうなった場合の対策についても、より明確に、実効性があるものにしていきたいと考えます。

大平自治振興会・自主防災会にはこれまで、最低限の防災備品しかありませんでしたが、本年度は簡易のテントやトイレ、投光器、救助キットを購入するなど充実を図りました。

防災力は、住民の結束力で左右されると思います。日頃のコミュニケーションをはじめ、地域の絆をさらに深めるとともに、防災訓練を重ねていきます。

災害に強い地域・集落づくりをさらに磨き上げていくことが重要と考えます。

市内震度5弱地震の概要

屋根損壊などの被害

4月18日に発生した県北部を震源とする地震で、大町市では震度5弱を観測しました。住宅の屋根瓦の落下や壁の損壊、石垣の崩落などのほか、八坂藤尾地区の覚音寺で国指定重要文化財の木造持国天立像が破損する被害が発生しました。人的被害はありませんでした。

市危機管理課によると、市内の被害状況は7月18日現在、住宅や倉庫など屋根の破損等が18棟、壁の破損等が10棟、ブロック塀・石垣の破損が5件、墓石の転倒・破損が4カ所。八坂地区では道路への落石や擁壁の崩落が6件発生しました。

公共施設でも市役所や市立大町総合病院などでエレベーターが一時停止。鷹狩山展望台と大町東小学校で内壁のひび割れが確認されました。

自治会の「共助」災害に備え備蓄を

大町市は大規模災害の発生に備え、自治会などの自主防災組織を対象に、防災資機材の購入に対する補助制度を設けています。住民同士が助け合う「共助」に役立ててもらおうと、食料やおむつ、簡易トイレなど備蓄品の購入に対し、世帯数に応じて5万円から20万円までを上限に、費用の2分の1を補助します。

市では糸魚川―静岡構造線全体を震源とする最大震度7の地震が発生した場合、7370人の避難者が発生すると想定。避難所では国からの支援が届くまでの3日間で、観光客などを含めて約4400人分4万食が必要になると見込んでいます。県の地震防災対策強化アクションプランに基づき、県と市、住民（自治会、事業所など）で、備蓄量の3分の1ずつを確保する方針です。

市危機管理課は「発災直後には住民による自助・共助が必要です。普段からの住民同士のコミュニケーションや備蓄品の準備が大切になります。補助金を有効に活用し、災害に備えてほしいです」と呼び掛けています。

4月18日の地震。八坂大平集落では石積みなどが崩落した

まちに暮らす、まちを創る

～市民記者が地域づくりに迫る～

中綱自治会加入率100％

新旧住民融合で強い助け合い

平地域

平地域の中綱自治会の加入率は、ほぼ100％です。30数世帯の小さな集落だからこそ、地域の絆は深いと思います。

今シーズンは近年にない大雪となりました。中綱基幹センターや作業所、お宮などの屋根の雪下ろしは例年1回ですが、今シーズンは2回行いました。

今年は大雪の影響で桜の木が倒れ、苗木を新たに植えました。桜存続のため周辺の草刈りなどに汗を流しました。

地域住民で協力する屋根の雪下ろし

集落内を花で飾る取り組みや中綱湖を中心とした環境美化なども重ねています。多くの住民の協力で地域活動が展開されています。

雪も多く、他の自治会に比べたら自治会作業は多いですが、5世帯の移住者がこの地を選んでくれました。

今年で移住18年目になるマウンテンロッジ「Wiz」の信田和宏さんは、44歳で都内から中綱に移住しました。「住民に受け入れてもらえたことがうれしかった」と話していました。先住民と移住者の区別ない助け合いのまちづくりを実現しています。（太谷裕彦）

外来種駆除で環境整備

共同作業で深まるコミュニティー

常盤地域

「特定外来種」とは、本来日本には生息しないはずの動植物が種々の輸入品に紛れ込んだり、持ち込まれたりした結果、各地で繁殖し生態系を破壊している生物です。

県や市でもその駆除を呼び掛けています。特定外来種オオキンケイギクの駆除作業に取り組む団体の活動の様子を紹介します。

農林水産省の事業「多面的機能支払交付金」を活用して活動する「西山地域農地・水・環境保全の会」です。交付金を使い、農用地、農道、農業用水路等の保全作業や、景観形成、コミュニティーの増進活動などに取り組んでいます。

その中の活動の一つが「オオキンケイギクの駆除作業」です。大糸線安曇沓掛駅北側の国道147号跨線橋法面での駆除作業を令和3年から続けています。隣接する須沼自治会の役員のほか、県大町建設事務所、県北アルプス地域振興局、市生活環境課からも実態調査を兼ねて参加していただいています。

駆除方法は「抜去」。刈り取りは全く効果がなく、抜き取りが最も効果的だそうです。

面白いように根からスポッ、スポッと抜けますが、駆除作業1年目は法面いっぱいに咲くその量の多さに四苦八苦。午前中では終わらず、昼食を挟んで午後も作業。抜いたオオキンケイギクを詰めたゴミ袋は幾山にもなりました。

2年目、見た目には結構咲いています。しかし「あれっ？もう終わった！」。

3年目、4年目、作業時間が短くなっています。作業前の光景も、4年前とは明らかに違います。確実に繁殖量が減少しています。6月の暑い中での作業ですが、「やればやっただけの効果がある」ことを体感すると疲れも吹き飛びます。根絶にはまだまだ長い道程となりますが、これからも地道に続けていきたいです。

地域住民が汗を流し駆除するオオキンケイギク

この駆除作業をはじめ、種々の共同作業を続けていると、ある日、「あれ、誰の息子だ？」「よく出て来てくれたね！」、そんな会話が聞かれました。自治会の共同作業には、年代を超えた新たなコミュニティーを醸し出す力があるように思います。

（牛越寛）

絆の深まり地域を創る

道路愛護で地域力向上

八坂地域

八坂地域では、地域づくり協議会の事業として集落内道路を中心に、側溝整備と路肩の除草作業(県道の一部、河川整備を含む)を推進しています。

道路愛護事業は、昭和43年に「八坂村公共土木愛護会」が設立され、日頃利用している身近な道路を中心に整備活動を推進するというものです。

作業延長は、開始当初より短くなりましたが、現在68・73キロメートルを対象として、4月と11月には側溝整備を、6月～7月と8月～9月には道路肩の草刈りを57年間継続しており、八坂地域の道路環境の維持につながっています。

日頃から地域に密着した活動に触れていた中学生が取り組んだのが自分たちの住む故郷を美しくすることでした。徒歩通学を常としていたことから、ガードレールやカーブミラーの清掃など通学環境の整備を進めました。

この取り組みは、昭和57年に開始され、年に1回通学道路のガードレールやカーブミラーをたわしや雑巾で水洗いし磨くもので、43年間継続しています。現在は、小学5年生から9年生を中心に、活動の趣旨に賛同した地域住民、市内の建設業者並びに県大町建設事務所の職員の皆様の協力を得ながら、相川トンネルから八坂支所、八坂支所下から中学校校舎までの約3・7キロメートルを参加者が一致協力して汗を流しています。

道路愛護に取り組む住民

これらの活動は地域環境の保全に尽力したとして、平成3年には道路愛護事業に対して「過疎地域活性化優良事例表彰」の国土長官賞を受賞し、平成15年には道路愛護事業並びに中学校生徒会に対して「地域環境美化功績者表彰」の環境大臣表彰を受賞しました。

八坂地域では人口の減少が進みながらも、新たに転入された人達からも、これらの事業に対する深い理解を得ながら事業が推進できていることを誇りに思います。今後も継続することで、地域力の向上が図られ、互いを助け合う絆が形成された、よりよい地域の創造につながる大切な事業の一つとして取り組んでまいります。

(塚田茂)

絆深めにぎわい創出

恒例の「よっとくれフェア」

美麻地域

美麻地域は人口減少が進み、自治会など地域コミュニティーの弱体化が問題になっています。常日頃から地域の絆を深め、支え合いの地域づくりが求められています。住民同士がともに協力し、顔を合わせて盛り上がれる場所をこれからも創り上げていきます。

住民組織・美麻地域づくり会議では、毎月29日に「お山のお肉のピクニック」を開催し、休日と重なった6月は「よっとくれフェア・美麻市」を同時開催しました。会場となる道の駅ぽかぽかランド美遊周辺では、各種催しや飲食などが楽しめ、観光客も含め多くの住民が参加し活気づいています。

今年のフェアでは、自転車をこいで作るかき氷、特設プールを使ったマスのつかみ取り大会が行われました。

同時開催となった、お山のお肉のピクニックでは、鹿革や角を使ったワークショップ、雑貨販売、ジビエ料理など多彩なブースの出店があり、美麻の魅力を発信しました。

両イベントとも多くの来場があり、会場の道の駅は地域活性化の核となっています。(種山亮平)

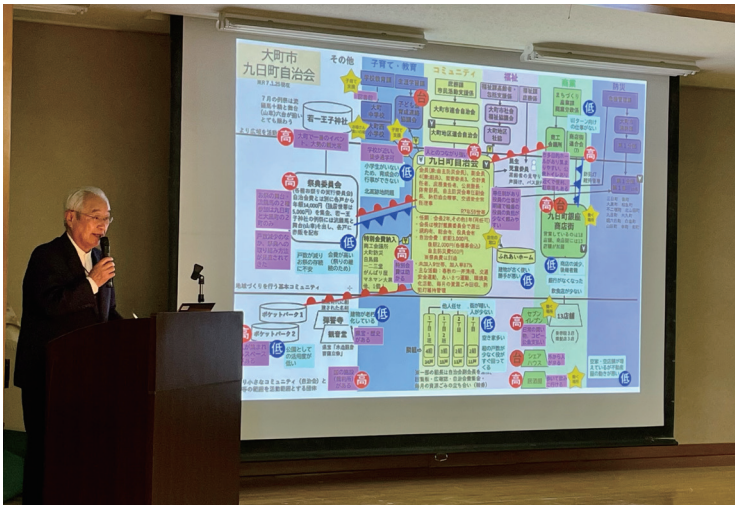
盛り上がるよっとくれフェア美麻市

持続可能な街へ機運高まる

九日町「くらしガイド」制作

大町地域

大町地域の九日町自治会は今年、移住希望者らに地元の暮らしなどを紹介する「くらしのガイド」を制作しました。市の人口分析等を行う調査研究事業のモデル自治会に選ばれたことをきっかけに始まった取り組みです。完成までに4カ月かかりました。その間、多くの住民が集まり、地元の魅力などを語り合いまとめました。地域創造など住民の思いが詰まった一冊に仕上がりました。



九日町「くらしのガイド」が完成し発表

市から委託を受けた持続可能な地域社会総合研究所の協力を受けながら制作しました。約60世帯と小さな地区ですが、3回開催したワークショップ等に延べ約60人の参加がありました。

くらしのガイドはA4判4ページです。自治会の構成や組織図、会費などのほか、地域の祭りや特色ある取り組みなどを紹介しています。公園など地区内の拠点となる施設については写真を使いながら地図上に落としました。

「困ったことがあれば、自治会長、隣り近所に声掛けしよう。自助・近所（共助）・公助」をテーマに掲げました。支え合い、助け合いのまちづくりを目指す中で、共助ではなくあえて「近所」を使いました。

平成23年には90世帯ありましたが、現在は58世帯に減少し、住民は危機感を募らせています。くらしのガイドの制作を通じ、移住者の受け入れ体制も含め、地域の将来を真剣に考える機会になりました。持続可能なまちづくりへの機運は着実に高まっています。（塩入博仁）

九日町の概要が一目でわかるガイド

防災講習会から学ぶ

助け合いで高める防災力

社地域

社地域の社公民館で7月26日、防災講習会と訓練を行いました。「能登半島地震・豪雨災害から考えよう～私たちができること～」をテーマに、市内の防災士・大久保隆志さんの講話や日赤奉仕団社分団による炊き出し訓練を通じ、災害時に機能する組織づくりや助け合いの重要性を改めて認識しました。

大久保さんは、能登半島地震や豪雨災害での支援活動を報告しながら、大規模災害時は行政が機能しなくなる可能性を指摘し、支援や救助がくるまでの間は、自治会や隣近所の判断・行動が重要になると説明しました。「（災害発生時）誰が誰を支援するのか、名簿を作りながら役割を決めることが大切」とのアドバイスもありました。被災者目線の講話は非常に勉強になりました。

防災講習会で簡易トイレを設置

発災時は、危険と隣り合わせの中、限られた情報で、避難や救助など災害対応にあたらなくてはなりません。

そこで大切なのが助け合いです。災害時、助けてくれるのは近隣住民です。社自治会としても災害備蓄品の充実や訓練を重ねる中で、いつどこで起こるか分からない災害に備えたいと思います。（丸山貴）

伝統や青少年育成 市内各地域の活動を紹介

大町三日町で伝統の「腹の神」

町内練り歩き無病息災を祈願

大町三日町で8月24日、無病息災を祈願する伝統行事「腹の神送り」が行われました。町内の小学生らが災厄の身代わりを願うわら人形を作り、みこしに乗せ、「津島牛頭天王、腹の神送り給ふ」と書いた習字を茅に吊るし、「腹の神送れ、腹の神送れ」と唱えながら町内を練り歩き山に送りました。

医学が発達していなかった昔、地区で赤痢が流行した際、悪疫を防ぐ牛頭天王に祈りをささげ、疫病退散を願ったことにちなむとされる神事。牛頭天王は、スサノオノミコトと同一視されていました。

明治期の神仏分離で牛頭天王はご祭神がスサノオノミコトに代わりました。しかし三日町は昔から「牛頭天王」の名で神事を行っており、地区の歴史に詳しい人は「少なくとも江戸時代から続く古い伝統行事」と話しました。

年番長の峯村浩文さんは「三日町に伝わる貴重な神事を末永く守り伝えたい」と伝統文化継承の重要性を語りました。

学校再編控えボッチャで交流

常盤・社　合同子ども球技大会

常盤・社地域の子ども会育成協議会は7月6日、合同の子ども球技大会を大町南小学校と常盤公民館で開きました。市内小学校の再編に伴い、両地域を通学区とする新校の開校を来年度に控え、地域内の小学生約130人がニュースポーツの「ボッチャ」で交流を深めました。

ボッチャは、白い「ジャックボール」に向けて、青や赤色のボールを投げ、近さを競い合うスポーツ。参加者は狙いを定めてボールを投げ、ジャックボールに当てて止めると、仲間たちから歓声が上がりました。

大町南小5年の青柳芽依さんは「新しい小学校になるのが楽しみ。常盤と社の皆で楽しく通えるよう、仲良くなりたい」と期待に胸を膨らませました。

常盤地域の子ども会育成協議会会長代理の藤巻大助さんは「同じ学校の児童となる子どもたち。球技大会を通じてチームワークを育み、新校へのスムーズな移行に役立ててほしい」と話しました。

6年ぶり泊まり体験復活

社山下地区で子ども会ミニキャンプ

社山下地区の山下育成部（越山典昭部長）は7月20日から21日にかけて、本年度の子ども会ミニキャンプを山下集落センターで開きました。コロナ禍で中止していた泊まり体験を6年ぶりに再開。わくわくする体験で夏の思い出を作りました。

山下地区とサンコーポラス地区の園児から高校生までの24人と保護者らが参加し、カレーを食べたり、花火などを楽しみました。

このうち小学生男子4人が広間に布団や寝袋を敷き泊まりを体験。6年生の越山登矢（とうや）君は「みんなで寝る前に遊んだりしてみたい」、山岸千燿（ちあき）君は「みんなで枕投げをしたい」と胸を膨らませていました。

ミニキャンプでは従来、泊まり体験が恒例だったが、コロナ禍に伴い、現在の小学6年生は一度も体験していませんでした。育成部は「この世代にも体験する機会を」と再開を決めました。

加入率向上へ連携強化

市連合自治会の取り組み

市連合自治会は、92単位自治会で構成されています。

主な事業としては、自治会加入促進運動や地域環境美化活動のほか、毎月1日に市民一人一人が身近な環境美化に取り組む「ついたち運動」を推進しています。

先進地視察や市内研修も行っており、近年は各地で大規模な地震や自然災害が相次いでいることを踏まえ、防災研修に特に力を注いでいます。

防災研修で訓練重ねる

本年の防災研修では、巨大地震発生を想定して避難所の開設・運営訓練を行いました。参加者は避難者役と運営者役に分かれ、さまざまな状況を想定したロールプレイに挑戦。実際の場面をイメージしながら臨機応変な対応力を身に着けました。このように災害時に活かせる実践的な学習を重ねています。

また、行政との意見交換を通じて地域の声を市政に届けるなど、住民と行政をつなぐパイプ役としても活動しています。市長を交えた地域懇談会の開催や自治会長懇談会を開催し、地域の課題を共有しながら解決に向けた意見交換を進めています。

加入率低下に危機感 令和6年64・7％

一方で、自治会加入率は年々低下傾向にあり、令和2年には72・5％だった加入率が令和6年には64・7％となりました。地域コミュニティーの維持が大きな課題となっています。

しかし、自治会は住民同士のつながりを支え、安心して暮らせる環境を守る上で欠かせない大切な組織です。

市連合自治会では、こうした基盤をしっかりと守り育てていくため、今後も各自治会や行政と連携しながら取り組みを進めてまいります。

【編集後記】

昨年、おらほのまち8号に旧常盤小学校の愛唱歌『われら励まん』の記事を掲載したところ読者の間で話題となり、常盤シニア倶楽部のカラオケ大会で歌われたと聞き、大変うれしく思いました。

おらほのまち9号の制作にあたり、前年同様、広報部員が自由に地域の素晴らしさを発信することとしました。

情報があふれている現代で、個性豊かな広報部員たちが必死になって自治会の実情・伝統文化・人物等々を取り上げて記事にしています。ぜひご一読いただき、発信者の思いや意図をくみ取っていただければと思います。

本号から「おらほのまち」を従来のタブロイド判から冊子型へとリニューアルいたしました。より手に取りやすく、読みやすく、そして保管していただきやすい広報誌を目指して編集を行いました。

地域の出来事や自治会の活動を身近に感じていただけるよう、今後も工夫を重ねてまいりますので、ぜひご覧いただけますと幸いです。

結びに、本誌の取材にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

（栗林俊博）

第9号の制作へ会合を重ねる
市連合自治会広報部会員

市連合自治会
広報部会
部会長
栗林俊博（常盤）
副部会長
種山亮平（美麻）
部会員
塩入博仁（大町）
太谷裕彦（平）
丸山　貴（社）
塚田　茂（八坂）